

「進化論」が生まれた
ガラパゴス諸島



1. サントクルス島のウミイグアナ。恐竜のように見えるが、体長は1m以下でおとなしい。海に潜るイグアナは世界でこの一種だけである。ガラパゴス諸島では、海に生活の場を求め進化したウミイグアナは大繁栄している。一方、陸に生活の場を求め進化したリクイグアナは、人間が持ち込んだ山羊に主食のサボテンをブタには卵を食べられ、多くの島で絶滅した。最近、ウミイグアナは海藻だけでなく人間の残飯を食べるものもできたという。

ダーウィンの研究により有名になったガラパゴス諸島は南米エクアドルの西方の太平洋に浮かぶ火山群島である。複雑な火山地形の孤島群からなり、生物が多様化し、多くの固有種・亜種が出現した。生物は火山と共に進化している。16世紀以降、多くの生物が乱獲されたり、野生化した家畜の餌となり絶滅した。「進化論」の主役達は、今後人間と共にどのような進化の道をたどるのだろうか。

<文：地質調査所 環境地質部 高田 亮；
写真：高田眞智子>



2. サントクルス島のダーウィン研究所で人工飼育されているゾウガメ。この鞍型の甲羅をもつカメはキリンのように首を伸ばし高い位置の植物も食べられるように、適応したと言われている。



3. サンチャゴ島の海岸、手前からウミイグアナの群れ、ガラバゴスアシカの母子、アシカのハーレムのボスは、大きな声を上げ観光客を威嚇するのでストレスが溜まるようだ。



4. エスパニョーラ島のガラバゴスアオアシカツオドリ、観光客が通過する小道にもかまわず巣を作る。